

## ロオダデエル伯爵の公富論について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2012-01-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高木, 仁 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/11179">http://hdl.handle.net/10291/11179</a>

## ロオダデエル伯爵の公富論について

### SOME CONSIDERATIONS ON LORD LAUDERDALE'S "PUBLIC WEALTH"

特選研究生

商学研究科 商学専攻

修士課程 二年次生

高 木 仁

TAKAGI Hitoshi

#### 〔1〕

1776年にアダム・スミスの「諸国民の富の性質と原因に関する研究」(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations)が刊行されてから今日に至るまで、この「国富論」についての祖述・研究・批判は枚挙にいとまない程であって、経済学の父と言われるスミスの偉大さの一面を示しているものと言えよう。これらの諸著作のうち最も古い時期にスミスを批判し、しかも後世の経済理論に影響を及ぼしたものの一つはロオダデエルの「公富論」である。ロオダデエルには経済理論の新古典派的な再構成への萌芽が見られるのであるが、どうしたことか我が国の経済学説史に関する著述では数少い例外を除いては一般にこの人物に触れることが甚だしいようである。

まずロオダデエルの略伝を Dictionary of National Biography (Edited by Sidney Lee, London, 1893) に依って簡単に記してみよう。彼は James Maitland と言い、1759年に第七代ロオダデエル伯爵の第二子としてスコットランドのミドロウジャン州で生まれ、1789年父の跡を襲って第八代のロオダデエル伯爵 (Eighth Earl of Lauderdale) となり、1839年80才のとき同じスコットランドのベリックシャー州でその生涯を閉じた。彼はまずエジンバラで学びやや長じてからはパリ・オックスフォードで、更にグラスゴーでも教育を受け、21才の折りに下院議員に当選したのち31才で上院議員に列せられ、晩年は引退して田園生活に入った。彼の為人は抜け目なく雄弁であったが、政治的対立から同僚議員と決闘しようとしたり、非妥協的な態度が災いして二度も上院議員からはずされたり、また青年期のフランス革命に対する理解者の立場から老年期の頑固な保守主義者への変身ぶりに見られる振幅の大いさなど相当な激情家であった。50年にわたる政治生活を記録するものとして上院議事録に86通にのぼる彼の抗議書が挙げられているほか数多くの著作をものしているが、主著はこの小論で扱う「公共の富の性質と起源及びその増加の手段と原因に関する研究」(An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth, and into the Means and Causes of its Increase, 1804)であって、本書と共に減債基金問題を扱っている「ウェリントン公爵への三つの手紙」(Three Letters to Duke of Wellington, 1829)の二冊が現在覆刻されている。

「公富論」は1804年エジンバラでその第一版が上梓されたのであるが、1808年に仏訳が翌1809年には独

訳が出され更には伊訳も刊行されているところを見ると、当時英国のみならず海外諸国でも相当な反響を呼んだ書物に違いないようである。第二版は1819年に同じくエジンバラで初版発行と同じ書肆から出版されているが、文体上の僅かな変化と幾つかの注釈と附表が増えただけでその内容は第一版と全く同じであった。唯、面白いのは第二版の広告に第一版の刊行以来いろいろの論評がなされたが著者がそれによって改めなければならないようなことは何もないとか、著者の学説は仏蘭西・独逸・伊太利・亜米利加で賛同を得たばかりではなく英国でも最初は抵抗があったけれど今では殆ど受け入れられているとか、その上労働は最早価値評価の基準とは見なされていないとか誠に挑戦的な文句が掲載されていることである。

「公富論」第一版は 365頁までの本文に本文の注釈14箇所をまとめた付録がついて全体で 482頁となっている。本文はまず英国皇太子への献辞ではじまり緒言が置かれた後、第一章は「価値及び価値の正確な測定の可能性について」という題で私富と公富の異なる事と、価値は財に固有なものではなく効用と稀少性の二つによって規定されることを述べている。第二章は「公富と私富及びこの両者が相互に持つ関係について」と題して私富の合計を公富と見なすことの誤りを指摘し、需要と供給の変化により財の価値が従って私富及び公富の価値が変動する事情を解明している。第三章「富の源泉について」では主として資本の利潤について述べ、今日の言葉で謂う利子の資本生産性説を示してその後の利子論に影響を与えている。第四章の表題は「生産された手段以外の手段により富を増加させる可能性について」、第五章のそれは「富を増大する手段及びその増加を規定する原因について」となっており、要するに節儉のみが資本形成の原因ではないことや資本が労働と同じく生産に於ける一箇の積極的要因であること、更に適切な富の分配が一国の富の増加にとって極めて有効であることなどを説いている。この小論では与えられた紙数が限定されているので本書全体から見れば理論篇の部分にあたる筈の第一章から第三章までについてのみ述べることとし、政策篇にあたる筈の残りの二章については今後機会を得て発表したいと考える次第である。そこで緒言から順次その内容を解説しながら問題点を記してゆきたいと思う。

## 〔2〕

ロオダデエルはまず緒言に於て言葉を正確に用いることの重要性を示し、富と貨幣を同一視することや公富と私富との混同が経済学の推論を誤らせていることについて述べている。彼はジョン・ロックの「人間悟性論」(1690) を引用しながら我々の観念を記録し伝達するところの言葉は人類の進歩の重要な源泉であるが、言葉の誤用によって生じた諸々の混乱を考えると言葉がはたして知識の進歩に役立ってきたのか、或いはその妨げをしてきたのか疑わしいものであるとしている (Public Wealth, p. 1)。経済学は言葉の誤用による混乱を不可避免的に受けなければならない、と謂うのは他の諸科学に於ては高い教育があり向上した精神を持っている学者がその主題を論述するのに比べ、経済学は社会の最も卑俗な連中の議論の対象にさえなるためである (前掲書 pp. 3—4)。これは真に面白い見解で当時から一世紀半以上も経過している現代の我が国へこの意見をそのまま持ち込んでも全く通用しそうなのである。だから employment を雇用と翻訳した結果、それはあたかも労働以外の employmnt を含まないような印象を与えているという事実が生じるのである。

さて、言葉が経済学の推論に与える影響の有力な実例は貿易収支によって富の増進を見積るところの重

商主義を考察することによって理解されるのであって、富と貨幣を同義とみなす習慣から海外貿易によってもたらされた収益が外国へ支払った額を超えた部分はその国の富の増加とみなされたのである（前掲書 pp. 4—6）。我々が国富を或いは私富を論ずる場合、私富は国富の一部として以外には考えられていないのであって、アダム・スミスにあっても同様なのである。即ち、社会のどの成員の財産増加も、若しそれが同一社会のいずれかの個人の犠牲に於てなされたものでないなら一様に国富の増加とみなされ、また個人の資産減少はそれが若し社会の他の成員の富の増加をもたらすのでないならば、必然的にこれに伴う国富の減少をきたすのである（前掲書 pp. 6—7）。しかし、ロオダデエルに従えば公富が私富の単なる合計を表わすものと考えられるべきでないことは疑う余地がないのである（前掲書 p. 8）。

### 〔3〕

第一章は本書全体の基礎となるところのロオダデエルの価値論である。彼に謂わしめると元来価値という言葉は財に固有な性質を表わしているのではなく、人間の欲望の対象となりしかも稀少にしか存在しない性質を持つ場合はどんな物でも価値があるとみなされるのである。だから価値を賦与するには二つの条件が必要とされ、(1)その財は人間にとって有用かつ快適なものとして欲望の対象となるべきであり、(2)一定の払底の度合に於て存在しなければならないのである（前掲書 p. 12）。この効用（＝欲望の対象）と払底の概念は今日我々が経済学の入門書を繙けば殆ど必ずと云ってもよい程はじめの数章のうちに見出す筈のもので、たとえ彼の謂う効用の意味が漠然として厳密さを欠いたものであったとしても、今から約160年も以前の著作としては立派な問題提起を行ったものと云えよう。彼が効用と払底の考えを誰れから受継いだのか本書のなかでは明らかにしていないのであるが、コンディヤックに拠っていると説かれている（大野信三著「全訂経済学史上巻」p. 283）。コンディヤックはその主著「相互関係に於て考察せられたる商業と政治」（Le Commerce et le Gouvernement, considérés relativement l'un à l'autre, 1776）に於て早くも効用と払底の上に基礎を置いた価値論を展開しており、効用とは財の内在的性質ではなく人が欲望を満足させるに際してその対象に措くところの重要性の度合を示すものであって、価値はこの効用に従って我々が認識するのであるが、その際に求める財の払底の程度もまた価値の大小に影響を与えると説いている（高橋誠一郎著「古版西洋経済書解題」pp. 372—373）。

さて次は価値の変化の問題であるがロオダデエルは先に価値は財に内在するものではなく効用の大きさと払底の度合によるとしたのであるから、必然的に効用と払底の二条件が変動すれば財の価値が変化することになる。そこで価値の変化は(1)財の数量減少による価値増大、(2)数量増加による価値減少、(3)需要増加による価値増大、(4)及び需要減少による価値減少の四つの事情によって支配されることになる（Public Wealth, pp. 12—14）。価値乃至価格の変化を財に対する需要と供給の釣合の変化に求めることは勿論こと新しいものではなく、コンディヤックやガリアニまで或いはそれ以前にまで遡り得るしスミスの謂う市場価格もこれと同じものを指しているであろう。スミスの市場価格もやはり財の需要と供給の割合如何によって変化するものであるがそれは飽く迄も自然価格を前提とした考えであり、常に自然価格を中心としてそれから乖離し或いは回帰するところのものであった（Wealth of Nations, 5th ed. pp. 58—59）。価値に関して客観的な費用学説を採らなかったロオダデエルにあつては、スミスの考えた自然価格は存在

せず唯スミスの謂う市場価格に相当するもののみがあった。

彼は自身の価値論を説明するため引続き幾つかの例を挙げているのだが、その主要なものを記してみよう。水は人間にとって非常に大切なもので効用を持っているが稀少性が無いために価値はない。だが一旦籠城とか航海とかの最中に水が不足すれば忽ち価値を得ることになる。金は稀少にしか存在しないものであるがそれに対して効用を認めなければ価値はない。だからスペイン人と接触する以前のキューバやサントドミンゴの住民にとって金は値打あるものではなかったが、スペイン人によって金の効用を教えられた後は従来からあった稀少性のほか効用も得ることになって彼の地に於ても金は価値あるものとなったのである。また財の価値はその財への需要と供給の釣合で定まるのだから品質の優劣には関係がない、その証拠に豊作のときは良質の穀物が多く収穫されるのに値段は安く不作のときは良質でない穀物が少ししか収穫されないのに値段は高い(Public Wealth, pp. 15—19)。

ロオダデエルはこれまで述べてきたような価値に関する考え方は決して新しいものではなく既に先人達によってかなり正確に説明されてきたのだが、価値は財に固有のものであるという考えを打破するには至らなかったことを認めた。彼はジョン・ロオの著作(1705)からそのような考えを次のように引用している(前掲書, p. 23)。「ロック氏は財の価格が売れ口との釣合に於ける財の数量に依存していると云っている。財の売れ口は財の数量を超えることは出来ないが需要ならそれを超えることがある。フランスから持込まれた葡萄酒の量が100噸でその需要が500噸だとしよう。需要が売れ口を超えているのでこの100噸は需要が売れ口と一致するだけの場合よりも高い値段で売れるだろう。だから財の価格は売れ口との釣合に於ける財の数量ではなく、需要との釣合に於ける財の数量に依存するのである」。しかし尠からざる人々が価値の真正なる尺度を労働に見出したとして、彼はウィリアム・ペテイとハリスを挙げて彼らの考えを記しているのだが(前掲書, pp. 22—26)、彼の主な目標はスミスにあるのだから直ちにスミス批判の部分へ移ろう。ロオダデエルはスミスの労働価値説を四つの観点から「国富論」の内容を引用しながら論駁している(前掲書, pp. 27—38)。(1)隔たっていない時期例えば同じ年のうちで労働の価値が変化することは、農業労働に対する需要が農繁期に高まることによりまた船員の需要が戦争で高まることにより、それぞれそれらの賃銀が騰貴する事実で明示される(Wealth of Nations, p. 117)。(2)遠く離れた時期をとってみると労働の価値が変化する事は、労働の実質価値が今世紀を通じてその貨幣価格よりも恐らく大きな割合で増加した事実によって証明される(前掲書, p. 79)。(3)遠く離れた国々の間で労働の価値が異なることは英国と米国を比較してみると、米国の労賃は英国のそれよりも高くしかも食料品の価格は米国の方が安いのでよく解る(前掲書, pp. 71—72)。(4)同じ国のなかでも処によって労賃が違うことは、例えばロンドンでの労賃よりもエジンバラでのそれは安いという事実で説明できる(前掲書, pp. 76—77)。かくして労働はあらゆる財と同様に時と処を異にすることによってそれ自身の価値が変化し価値の真正なる尺度たり得ない。だからスミスも一方で労働こそが唯一の価値の尺度であると云いながら、他方では労働の価格が正確に確かめられないのは同じ場所での同じ種類の労働に対して支払われる価格が異なるからであると云っているのである(前掲書, pp. 76—77)。ロオダデエルはこのように労働価値説を排撃して彼の主張する効用と稀少性によって価値が形成されることと、財に対する需要とその供給の釣合の変化が価値の変動の理由であることを再び

説いて第一章を閉じている。しかしスミスの価値乃至価格についての考えには実質価格と名目価格のほか自然価格と市場価格があり、都合四箇の概念があるにも拘らずロオダデエルはこれらを明確に区別した上で問題を論じているようには見受けられないのである。その結果彼は専ら労働の名目価格と市場価格を論じて労働が価値測定の尺度たり得ないと断定しているのであるが、それから一步進んで実質価格及び自然価格なるものは存在せず唯名目価格ないし市場価格のみが存在することを立証するには至っていないのである。

#### 〔4〕

スミスは或る社会に属する各個人の富の合計が正しくその社会の富の総額であるとみなし、儉約は私富の増加従って公富の増加の原因であり浪費は私富の減少従って公富の減少の原因であるから総ての浪費家は公の敵であり総ての儉約家は公の恩人であると説いているが（前掲書、第二篇第三章）、ロオダデエルは本書第二章に於て公富と私富の性質が異っていることを明らかにしている。スミスのような考えに基いて国富の残高を計算することは以前から試まれてきたところで、1664年ベティによって土地・家屋・商品・家財・金銀貨幣等を集計して国富が算出されて以来グレゴリー・キング、アンドルウ・フック、ウィリアム・パルトニイ、ヘンリー・ビイク等が同様の方法で英国の国富をそれぞれ幾許かの金額に見積ったのであるが、ロオダデエルは彼の価値論から発してこのような考えに同調できなかった（Public Wealth, pp. 41—43）。既に幾度も触れた通り価値は効用のみでは発生せず稀少性が加わって初めて賦与されるものであるが、この稀少性という点に着目すると公富は私富の合計であるというスミス流の考えが通用しなくなるのである。例えば生活必需品と便宜品を豊富に所有ししかも清澄な水流に満ちている一国があると仮定する、若しその国の水量を稀少ならしめるとすれば水は価値が生じるから井戸の所有権の価値の合計額だけ私富が増えることになるが、その為に公富も同様に増加したということになるだろうか。また例えば或る種の食料の稀少性をなくして水の存在のように豊富にすることが出来ると仮定すると、その食料は当然価値を減ずるから私富の合計も減少することになるが、一体だからと云ってこの場合に公富も減少すると云えるだろうか。更に一步進んで総ての個人の欲望や想像力が求めるところのものは一切入手できるような社会がある場合を考えると、人々は公富の恩恵を最大限に享受できるにも拘らずあらゆる財について価値が認められないので財は私富を構成するものとなり得ないことになる（前掲書、pp. 43—49）。

このように考えてくると私富の合計が必然的に公富に等しいという見解が揺らぐのであって、ロオダデエルは富の変化が財の量の変化から生じる場合私富の増加は公富の直接的減少の証拠であり、私富の減少は公富の直接的増加の証明であるとし、その結果公富は人が彼にとって有用かつ快適である為に欲求する総てのものからなると定義し、私富は人が彼にとって有用かつ快適である為に欲求ししかも一定の払底の度合で存在する総てのものからなると定義した（前掲書、pp. 55—57）。別言すれば公富は効用という観点からのみ考察すればよいのだから財が豊富に存在することが公富の増加に連なるのに反し、私富は効用と稀少性の雙方から考察しなければならないから財の払底が私富の増加に連なっているというのである。ところで私富の本質と私富が受けやすい価値の変化とを理解するために、第一章で明らかにした財の需要と供給の釣合の変化について研究しなければならないのだが、それには前述の四つの異なる事情を順次調べてみ

なければならない。

(1) 如何なる財にせよその数量の減少がその財の価値に及ぼす影響について。例えば或る社会の砂糖消費量が 1,000ポンドで単価が 1 シリングの場合、砂糖の数量が 500ポンドに減じたらその単価は逆比例的に 2 シリングになるだろうか。個人の嗜好はそれぞれ異っているから従来通りに砂糖の消費を求めるものもあれば、消費を節約ないし断念するものもあり、競争の結果単価が 8 シリングにまでも上昇するかも知れない。財の数量が減少するに際して従来通りの消費を享受しようとする人間の欲望が財の価格を上昇させることは疑いなく、この上昇の度合は財に対する執着の程度によっているが、執着の程度はその財に対する必要性と習慣又は嗜好に依存している。そこで穀物や肉のような生活必需品は場合により 50 倍にも価格が騰貴するが、嗜好品や贅沢品は 2・3 倍にすら上らないのである。要するに、財の数量の減少はその財自身が帯びている必要性に応じてそれぞれ異った程度で価格の上昇をもたらすのである。(前掲書, pp. 59—66)。(2) 如何なる財にせよその数量の増加がその財の価値に及ぼす影響について。(1) の場合の説明から解るように或る財の数量が 2 倍になってもその価格が丁度半分に低下するのではなく、数量の増加は財が持っている重要性に応じてそれぞれ異った程度で価格の下落をもたらすのである。だから穀物の数量がその通常消費量の 10 分の 1 だけ増加すると穀物の値段が 2 分の 1 に減じてしまうことがあり得るのに反し、ダイヤモンドや金はその数量の 10 分の 1 の増加がそれらの値段に穀物の例のような影響を及ぼさないのである(前掲書, pp. 66—72)。(3) 如何なる財にせよその需要の増加がその財の価値に及ぼす影響について、砂糖の供給が 1,000 ポンドから 500 ポンドへ減少した場合その単価が 1 シリングから 8 シリングへ騰貴するかも知れないという前掲の例が正しいとすれば、需要が倍に増えた場合も同じような結果が生じるだろう。供給減少によって砂糖の価格が上昇した場合と同様に需要が急増した場合も値上りのせいで砂糖の消費を節約したり断念したりする人々の存在が値上りを抑制することになるが、この抑制が値上に作用する程度は需要の急伸が生じた財に特有な性質に依るのであって、生活必需品とあらばどんな値上りでもその購入を断念するわけにはゆかないのである(前掲書, pp. 72—76)。(4) 如何なる財にせよその需要の減少がその財の価値に及ぼす影響について。この題目に関しては既に考察した三つの題目の結論から推量できるように需要の減少した財は値下りするが、その際生じる価値の低下の割合はやはり他の諸例と同様にその財の性質如何にかかっている(前掲書, pp. 77—79)。ロオダデエルはこのように需要と供給の釣合の変化を四つの場合に分けて説明したのであるが、価値の変動は財の供給側の変化によるにせよ需要側の変化によるにせよ私富と公富の上になんらかの影響を及ぼすのである。即ち、ある財の数量が減少することでその財の価値は上昇するが公富はそれにより減じ、ある財の数量が増すことでその財の価値は低下するが公富は増加する。これに反して需要の増加ないし減退で財の価値が上下する場合、公富は私富が変動するにも拘らず変化しないのである(前掲書, pp. 79—80)。しかし、財の供給が変化する場合の説明はいささか厳密さを欠くようである。何故ならば財の需要の弾力性如何によっては財の数量に単価を掛けたものは、必ずしも供給が変化する以前のそれを彼の説明した通りに上廻ったり或いは下廻ったりしないかも知れないからである。

次いでロオダデエルは財の需要と供給が増減した場合に生じる支出順位の変化を示すことによって需要

の弾力性の概念を説明する。(1)数量減少の場合。ある社会の砂糖供給量が1,000ポンドから500ポンドへ減った為単価が1シリングから8シリングへ騰貴して砂糖へ支払われるその社会全体の金額が50ポンドから200ポンドになったとしよう。追加された150ポンドは元来他の諸財の価値を減じるだけで私富の合計には変化を与えないように考えられるが、それは正しくないのである。値上りした砂糖入手のため追加支出する150ポンドは従来獣肉・葡萄酒・芥子の三財に支払われたものから50ポンドずつ振替えたと仮定しよう。まず獣肉を購入するための50ポンドが砂糖購入のため向けられたとすると、獣肉は50ポンドの需要減退を招くが既に述べたような理由で最終的には50ポンド以上値下りする。葡萄酒と芥子についても同様の事情があるが同じ50ポンドの需要減退でもその値下りへの影響はそれぞれの財によって異なる(前掲書, pp. 81—86)。(2)需要増加の場合。1,000ポンドの砂糖供給が変らないままで需要が突然2,000ポンドに増えたとすると砂糖の消費者は単価が騰貴するので今迄の50ポンドに代えて200ポンドを砂糖の入手に支払わなければならない。砂糖を消費するため追加的に支払うこの350ポンドが前例通り三種類の財の消費を同額だけ切詰めて得られるとすれば、獣肉・葡萄酒・芥子の三財はそれぞれ116ポンド13シリング4ペンスの需要減退を招来するが、実際には減少した需要の額以上に各財の価格が低下する。大きなそして突然の需要の変化が国富に変化を及ぼさないまま、私富には致命的な損害を与えるのはこのような原則があるからである(前掲書, pp. 86—90)。(3)数量増加の場合。ある財例えば砂糖の数量が増加すれば砂糖の価格は既述のように下落し、元来砂糖の入手に充てられていた支出が他財の取得に向けられ、新しく需要の増えた財は当然値上りする。穀物は人間にとって不可欠なものであるが、このような財は嗜好品に比べてその数量が増したときに価格の低下の度合いが大きい。と云うのは必需品はその数量の増加に際して急速な需要の拡大が望めないのに反し、嗜好品は新しい需要の創造が容易であり価格の低下が軽微で済むからである(前掲書, pp. 93—96)。(4)需要減少の場合。これは前出の三つの例からして需要が減少した財の価格が低下し他の諸財の価格が上昇することは明らかである(前掲書, pp. 96—99)。以上述べてきたように需要の弾力性が存在するので公富と私富がともに増加又は減少することはないのだが、唯一の例外はある財の数量との需要が比例的な増加を示ししかも増加した数量と需要をまかなる資金が同時的に造出された時である(前掲書, p. 105)。

ロオダデエルがこの章でとり上げている経済現象の多くは未だ正確に概念化されてはいないものであるが、その内容は今日我々が把握しているものと殆ど変わらないのであって、パグリン教授もロオダデエルは消費者選択や需要曲線を含む価格決定機構を説明し又需要の弾力性と所得効果の考えを持っていたと述べている(Morton Paglin, Malthus and Lauderdale, New York, 1961 pp. 36—38)。彼の提起した経済現象の捉え方は効用・弾力性・所得効果等々新古典派の経済理論へ結付くものが多く、フェルナー教授もロオダデエルをセイやシニアとともに新古典派の先駆者の地位に置いている(William Fellner, Emergence and Economic Analysis, New York, 1960, 邦訳書, p. 183)。

## 〔5〕

ロオダデエルは第三章に於て富の源泉はなにかという問題を論じ、特に資本が富を形成する上で労働や土地とともに積極的な要素の一つであることを強調している。彼はこの問題をまず歴史的な概観し、総て

の生産物は土地の生産力に依存しているという考えが紀元前4世紀頃からロックに至るまで続いており、これに対して外国貿易の受取超過が富の源泉であると主張する重商主義者が興り、更にその反対者として重農主義者とスミス及びその信奉者が現われたことを記している (Public Wealth, pp. 111—116)。しかしスミスは国富論のなかで或る時は労働が富の源泉であるとし、或る時は土地と労働が年々の生産物を生むと説き、更には土地と資本が富の根源であるとも云い混乱しているが、土地・労働・資本の三要素が富の本源的な源泉であって社会の異なる発展段階でこれら三者は異なる割合の組合わせで富の生産に貢献するのである (前掲書, pp. 116—122)。まず(1)土地について謂うと、人類の初期の段階では採取経済だから富の形成に於て土地の占る役割は大きい。その後労働と資本が加わって農耕が行われるようになったが、自然の全き生産物にせよ人間の手が加えられた生産物にせよ、土地が人間に与える有用なものは一切国富を増すものと考えられている。フランスの重農主義者達は土地が富の生産の源泉であることを認めながら、農産物のうち翌年の生産のため控除される分と耕作者の生活の資料として控除される分とを富とは認めないが、それらも亦人間の欲望の対象たることを失わないから富なのである (前掲書, pp. 122—130)。

次に(2)労働が富の源泉であることは自然が無意識のうちに我々に提供してくれる生産物と、我々が労働を加えたときに得る生産物とを比較すれば容易に理解できる。スミスは重農主義者達が職工・製造業者・商人を不生産的階級であるとみなす誤りを指摘し、それらの人々の労働もまた生産的であると主張したのであるが、まことにもっともな次第である。スミスはその給付が終了したとたんに消滅してしまい販売可能な商品のうちに具体化されることがない種類の労働を不生産的とし、特定の財貨に具体化され他日それに投入された労働量と同じだけの労働量を支配することが出来るような労働を生産的としている。しかし、同じ労働でありながらそれが費された対象の性質によって、生産的労働とされたり不生産的労働とされたりするのはおかしい。例えばパイを作るための労働が私のコックによってなされれば召使の労働だから不生産的であり、菓子屋の職人によってなされれば商品として具体化されるから生産的であるというのでは矛盾している。若し我々が富とは人間の欲望の対象が潤沢にあるという事実から成るとする立場にたてば、人間の欲望を瞬時のうちに満足させる労働と財貨に具体化され後日に人間の欲望を満足させる労働とを区別する必要はなくなり、両者とも生産的な労働であるとみなしてよい (前掲書, pp. 130—153)。ここではさしものスミスもさんざんにやっつけられてしまっている。スミスは重農主義者達の農業にのみ生産性を認める態度を攻撃しながら、自らはその影響を完全に脱しきることが出来ず、なおまたヒュームの影響も受けて無形の役務を不生産的と断定してしまったのである。この点を鋭く指摘したロオダデエルの功績は大きいのであるが、はたしてこの批判が彼の独創によるものであるかどうかは疑問の余地がないわけではない。というのは「公富論」公刊の前年にあたる1803年に出版されたJ・B・セイの「経済学概論」(Traite d'economie politique)には、効用を賦与しあるいは増加する行為が生産であるとはっきり記されているからである。また生産的労働の結果である商品の問題に関連し、ロオダデエルは既述のように実質価格ないし自然価格に対する研究が不充分であった為、スミスの謂う商品に含まれている労働が投下労働量を意味するのか、それともその商品と引換えに支配することの出来る労働量を意味するのかははっきりしなかったにも拘らず、この問題には全く触れることがなかったのである。この問題は結局のところはマル

サスの出現まで待たざるを得なかったのである。

最後に(3)資本についてであるが、資本の利潤の本質についても如何にしてそれが生じるかについても、それが重要な問題であるにも拘らずこれまでのところ満足すべき説明がなされていないのである。スマスは労働者が生産過程に於て原料に付加した価値は、労働者の賃銀と雇主が前払した資本に対する利潤の二つに分解され、従って利潤は労働者のポケットから資本所有者のポケットへ単に移転したものに過ぎないとしている。このように考えれば利潤は富の源泉ではなく労働から派生したものにほかならぬこととなる。しかし資本は人間の労働に代替するか、或いは人間の労働では遂行できない部分の職能を執行して利潤を生むのであるから、それが富の源泉の一つであることは明らかである (Public Wealth, pp. 154—161)。

ロオダデエルは資本が広汎な用途に用いられている関係上、資本の形態を五つに分類して列挙するのである。(1)固定資産に用いられる資本。労働に代位したり労働ではなし得ない職能を遂行したりする資本の形態ほど、利潤を獲得する上で明白な働きをするものはない。土地の耕作に際し鋤を用いる1人の労働者は爪を用いるだけの50人の労働者に匹敵し、鋤を用いる1人の労働者は爪だけを用いる300人の労働者に等しい働きをする。かくして鋤は49人分の労働を代位し、鋤は299人分もの労働に代位する。また蒸気機関は炭坑から水を汲上げるとき300人の労働者が行う労働よりも余計に仕事する。しかもこれらの道具や機械や装置は代位された労働に支払う賃金よりも遙かに廉価な費用でまかなうことが出来る。(2)内国貿易の流動資産に用いられる資本。製造業者に対して販売に先立って原料を供給し、また製品を市場へ提供するところの資本もやはり利潤を生む源泉である。若し消費者がこのような資本の助けを借りずに財貨を入手しようとするれば、実に多くの手間と時間が要求される。例えば靴下を手に入れようとする消費者は、まず羊の飼育者からはじまって梳毛工・紡毛工・織布工・染色工そして最後に靴下製造工のところへそれぞれ出掛けて行き、その度ごとに代価を払わねばならぬことになる。これは彼が自身で利潤を得るため利用することの出来る資金を靴下の入手に先立って支払い、また羊毛を選んだりそれをあちらこちらの職人のところへ運んだりするため労働を費さねばならぬことを意味する。しかし資本はこのような部分の職能を代行するのである。(3)外国貿易の流動資産に用いられる資本。この場合に資本が果た役割は内国貿易に於けるそれと本質的には全く同じである。(4)農業に用いられる資本。この場合は資本が機械や装置として用いられたときと同じことで、ただ農業だから牛馬や土地改良の形をとっている。(5)流動資本に用いられる資本。ここで流動資本とは貨幣を指しているのだが、若し貨幣がなければ取引は物々交換になってしまい、相互に適宜な時と処と品物とその量を求めあうことは大変な量の労苦となる。貨幣の存在はそのような労働を代替するだけではなく財の価値を計る手段としての働きもするのである。かくして資本は土地と労働が富の生産に際して積極的な役割をはたすのと同様に、労働にとって替るかさもなければ労働では遂行し難い役割を行うことによって、利潤という富をあげるのである (前掲書, pp. 162—206)。

利潤をなんらかの派生的な所得とは見なさないで、資本が専ら給付するところのものであるとし、土地・労働・資本の三者にそれぞれ生産性を認めて明解な経済理論を樹立したことは、ロオダデエルの経済学に対する大きな貢献と云えよう。特に資本に生産性を認めその給付を独立の生産的な役務として扱って

る点は、後世の利子理論に於ける資本生産性説の起源の一つをなすもので、バワックもこのことを高く評価して紹介している (Böhm-Bawerk, *Geschichte und Kritik der Kapitalzinstheorien*, Jena, 1921, 英訳書, pp. 96—100)。またエガートンも、利潤の性質に関してばらばらの観察ではなく、理論の形で一貫した学説を提唱した最初の人物であったという名譽は、ロオダデエルに帰属すると述べている (Hugh E. Egerton: *Palgrave's Dictionary of Political Economy Vol. II* Edited by Henry Higgs, London, 1923)。しかしバワックも指摘しているようにロオダデエルの利潤概念はスミスのそれと同じように、利子と企業家報酬の雙方を含むものであった (前掲書, p. 96注)。セイは既に利潤を利子と企業家報酬に分割し、更に利子を総利子と純利子に分けているのだから、ロオダデエルはこの点でセイに数歩を譲らねばなるまい。また資本が人間の労働ではなし得ない役割を果すのだと述べているのだが、では一体どのような役目を実際には行うのかという点になると、明瞭な説明が欠けているのである。これは機械や装置を用いて人間の労働では出来ない化学反応だとか高い圧力を作ることだとかを指しているのであろう。だがいずれにせよロオダデエルはその価値及び価格理論や資本及び利潤理論を通じて、新古典派の先駆者たるの地位を失わないことは確実であって、例えば効用理論は19世紀後半の限界革命を通じ、需要・供給型の価格決定理論はマルサスやマアシャルを通じ、また利子の資本生産性説はマルサスやケアリイを通じ、それぞれ経済理論の新古典派的総合のなかに生かされているのである。